

職 員 心 得 メ モ

医学、特に精神医学においては、人体にかかわる事はもちろんの事であるが、その「人体」をもつ「人」の「人世」に、かかわる事の多い事も、当然である。換言すれば、医学、特に精神医学は、その一人の「人」の「人世」に含まれるもの、ともいえよう。この様な考えから、私たちは、少く共、以下の様なことを心得ておく必要があると思われる。

1) 「自分を高めようとする努力」

家庭にせよ、職場にせよ、その他どこにおいても、そこの成員が自分を高めようとする態度がある時、そこのふん囲気が生き生きとしてくる。その態度によって高い深い気分性が開かれていくにつれて、そこの成員みんながしだいに自己実現の方向に変化する。自分を高めてしまった人よりも、自分を常に高めようとする人を一つの目標にしたい。

人間には、有限な清さ、能力しかない。この様な人間が、自分の清さ、能力を自負し、他人をべっ視することは、自分を汚すことになる。環境も、私たちの日常の考え方も、私たちの気づかぬうちに、私たちを汚すことがあろう。故に私たちは常に自分を高めようとする態度を堅持する必要がある。能力を高めようとすることも大事であるが、私たちの清さをいっそう清くし、汚れない様に努力することが一般に軽視されているだけに、いっそう重視したい。言うまでもないが、清さは、外面的な清さもさることながら、内面的な「心」のあり方としての清さを指しているとするべきである。

人間は有限の清さ、能力しかもたないが、互いに手を取りあい、自分を高めようとする努力しながら、互いに高め合うように努力したいものと思われる。

2) 「他人をだいちにしようとする努力」

言うまでもないが、ここでの「他人」とは、特別に能力のある人を指すのではなく、実存としての人間である。

自分以外の人間は、すべてここに含まれることになる。人間であれば、誰でも、程度の差こそあれ、誰もがその可能性をもっている。有限存在でありながら、人間は「無限」をうつす可能性をもっている。故に人間は、本来の意味において自分を高めようとすることができ、自分を高めることができるのである。この実存としての人間、或いは人間性を尊重することから、他人を大事にすることが始まるといってよい。

動物をべっ視するわけではないが、人間は動物ではない。ジュポスは人間と動物（他の生物）を分つものとして、humanness（人間性、人間らしさ）をあげている。又、彼は「人間への医学は、…人間はその性状からいって、最も進化した動物とも異なっているという事実のために、それは獣医学とさえも別のものなのである」と言っている。この大事な実存の視点を、私たちは民族、身体条件、言語、能力、貧富、閥等の違いによって見失うことが往々にしてあるようでもある。すべての人間が重要であるという基本原則を、私たちすべてが受け入れるならば、私たちの職場、家庭、社会の多くの問題がしだいに解決、解消するであろう、とロージンは述べている。

他人をだいにしない態度は、結局は本当の意味で、自分を粗末にすることになる。やがては人間性尊重に対する挑戦となる。これは他人や社会はどうなってもよいのだ、自分さえよければよい、或いは自分さえもうかればよい、自分さえ良い子になればよいという考え方の必然的な帰結を招いてしまう。いくつか例示すれば、公害たれ流しの企業、権ぼう術策を駆使する権力獲得と手段をえらばない立身出世主義、自分に同調しないものへの中傷、攻撃、積極的に悪いことはしないが他人の不幸に対する無関心やちょう笑等々があるが、これらはすべて現在の不安な社会状況と多少にかかわらず関係がある。

3) 「社会につくそうとする努力」

既に述べたように「自分を高めよう、他人をだいにしようとする努力する」態度が社会の為につくすことの基礎であることは言うまでもない。世の為、人の為と言っても、すべては自分自身をととのえることから始まるのである。いわゆる有名な偉い人と、社会につくしている人とは必ずしも一致しない。ペーユは、「われわれの時代は、労働の靈性という基礎の上に、文明を築きあげていくことを、その独自の使命、天職としている」、また「真の偉大さの今日的形態は、労働の靈性に基礎づけられた文明である」と言う。このペーユの言葉は、社会の為につくすということについて、根本的な、だいにしないことを教えている。

大臣の仕事も、下級官吏の仕事も、病院職員の仕事、農家等々の仕事もすべて、労働の靈性に基礎づけられているのでなければならない。その態度は自分を高めようとする態度や、職業地位や能力に関係なく、裏側に自分の仕事に取り組んでいるすべての人を同等に尊重する（他人をだいにしようとする）態度に通じるのである。このような視点が確立するならば、私たちは生命の根をいっそう深く持つことができるであろう。

最後に印度のスワミ・ビベカーナンダは兄弟弟子の手紙の中でつぎのように言っている、「人の欠点を探することは非常に容易なものだ。しかし聖者の特徴はひとの長所を探るところにある。決してこれを忘れるな」と。必要とあれば、もちろん欠点を指摘し、しかりつけることもあろうが、相手の本質の充実した展開がなされるようにつねに配慮していなければならない。

相手の心に至る第一歩は相手の長所をまず知ろうとすることから始まるのである。このような身近にあることを注意することが、目立たないことであるが、社会につくすことの一つであり、しかも根本的に大事なことであると思うのである。

以上、きわめて断片的な論旨ではあるが、この中から何かを自得してもらいたいと願うものである。

追記 以上のようなことどもを自得していれば、私たちの為すことの一部である老年医療においても、老年者に残された、長くはない「生」が、よりいっそう充実したものになるような、私たちの「かわり」が見いだせると思われる。